

【太政大臣兼家】

「そのほどは、夢ときもかむなぎも、かしこき者どものはべりしぞとよ。堀河の  
摂政(兼通)のやりたまひし時に、この東三条殿(兼家)は、御つかさどる御止  
させたまひて、いと辛くおはしましし時に、人の夢に、かの堀河院より、矢をい  
と多く東さまに射るを、いかなるぞと見れば、東三条殿に皆落ちぬと見えけり。  
「よからず思ひ聞こえさせたまへる方より、矢のおはせたまふは、悪しきことな  
らむと思ひて、殿に申しければ、おそれたまひて、夢ときに問はせたまひければ、  
「いみじうよき御夢なり。世の中の、この殿にうつりて、あの殿の人の、さなが  
ら参るべきが見えたるなり」と申しけるが、あてざらざりしことかは。

また、その頃、いとかしこきかむなぎはべりき。賀茂の若宮の、  
て、臥してのみものを申ししかば、「うち臥しの巫女」とぞ、世人つけてはべりし。  
大入道殿に召して、もの問はせたまひけるに、いとかしこく申せば、  
「たること・過ぎに、方のかことは、皆さ言ふことなれば、しと思しめしけるに、か  
なはせたまふことともの出でくるままに、後々には、御装束たてまつり御冠せ  
させたまひて、御膝に枕をせさせ、ものは問はせたまひける。それに一事と  
して、後々のこと申しあやまたざりけり。さやうに近く召し寄するに、いふかひ  
なき御身のものにもあらで、少し御許ほどのきはにてぞありける。  
まは(際)一分際

(注)○夢とき——夢の吉凶を判断する人。○かむなぎ——巫女。○はやりたまひし——  
榮えていらつしやうだ。○矢のおはせたまふ——矢を受けなさる。○賀茂の若宮——  
上賀茂神社の末社の一つか。○大入道殿——兼家のこと(子の道長を「入道殿」と呼  
ぶのに対して)。この時点ではまだ出家(入道)はしていない。○御許——女房。

※・K差上げる

S.Vしはまる (金/着...とく)

当面の問題

過去の

→ 正装冠

私に取巻

【語彙・文法】(○＝語彙・●＝文法・☆＝常識。ただし重なるところも)

- かしこき ☆つかさ ●落ちぬ ●思ひ聞こえさせたまへる ○悪し ○いみじ  
○さながら ●参るべき ●ぞらざりし ●かは ○臥す ○さしあたる ○過ぎにし方  
○たてまつる ○申しあやまつ ○いふかひなし ○ほど ○きは

【問】

- ① 点線部1「よからず思ひ聞こえさせたまへる方」とはどういうことか(具体的に)。

兼通が、兼家を快からず思っていること。  
↓兼通の側から矢が飛んで来る。

- ② 点線部2「悪しきことならむと思ひて」とあるが、誰が、どうしてそう思ったのか。

悪いことだらう「ある人が」

嫌われてゐる人から矢が飛んで来、家に刺さる  
↓呪いや敵意があるのだから。

- ③ 点線部3「いみじうよき御夢なり」と夢ときが言つたのはなぜか。

大変良い御夢だ。

世が、この殿(兼家)についてゐて、兼通のあとを  
はる人が、そくりにあはれてゐるはず(全然)だ。

- ④ 点線部4を品詞分解して現代語訳せよ。

下(動) 兼助 遇(名) 名  
あて／ざら／ざりし／ことか／は(ある)

あてなくはかた、ことだらうか。

いやない。二あたらなれたことであらう、否(ない)。

- ⑤ 点線部5「さしあたり( )こと・過ぎにし方のことは、皆を言ふことなれば、しか思  
しめしける」とはどういうことか(簡潔に)。

(首主)過去のことも現在の問題を巫女が言ひあつてゐるものだから  
兼家は(い)貫友の老翁の語は耳当だ

【文法基礎線】使役・尊敬の助動語

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
す	せ	せ	す	する	すれ	せも	下二
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させも	下二
しむ	しめ	しめ	しむ	しめる	しめれ	しめも	下二
(下接語)	一ば	一けり	一。	一とき	一ども	一一	

意味 ① 使役(一せしめ) ② 尊敬(一さす) ※

※尊敬の意味となるときは、必ず下に尊敬語を伴う(下が尊敬語でも使役の場合も)

☆今回の本文中では、①②の意味はそれぞれ何回使われているか。(二重尊敬)

接続 (す) 四段・ナ変・リ変  
(さす) 三才以外  
(しむ) 活用語  
未然形

② 二重尊敬が、使役+尊敬が  
↓主語と動作主が同じか？

【現代語訳】

その時代は、夢解きも巫女も、優れた者たちがおりましたそうですよ。堀河の摂政(兼通)殿が栄華を極められていた時に、この東三条(兼家)殿は、御官職も停止されなさって、たいへん苦境にいらっしゃった時に、ある人の夢で、その兼通殿のお邸から、矢をたいへん多く東に向けて射るのを、どうしたことだと思って見ると、兼家殿のお邸にみな(矢が)落ちた、という夢を見た。(兼家殿を)良くなく思い申し上げていらっしゃる所(兼通殿)から、(兼家殿が)矢を受けなさるのは、悪いことであろうと思って、(兼家)殿に申し上げたところ、(兼家殿は)恐れなさって、夢解きにお尋ねになったところ、「たいへんよい御夢である。世の中が、みなこの殿(兼家)に移って、あの殿(兼通)に仕えている人が、そっくりそのまま参上するはずの運命が夢に現れたのである」と申したのは、当たっていないもなかったというほどのことか(それどころではない、まさにその通りになったのだ)。

また、その頃に、とても優れた巫女がおりました。賀茂の若宮が(巫女に)お取り憑きになると称して、必ず横になったまま託宣を申したので、「うち臥しの巫女」と、世間の人々はあだ名をつけておりました。(この者を)大入道殿(兼家)のお邸にお呼びになり、ものをお

尋ねになったところ、たいへんみごとに託宣を申し上げたので、現在直面していること、過去のことは、みな（この巫女が）そう言う通りなので、（兼家殿も）そう（この巫女の言うことは真実だと）思いになったが、（さらにそれ以後のことも）的中なさることが何度も出てくるうちに（兼家殿はこの巫女を深く信頼されて）、後々には、ちゃんと束帯をお召しになり、御冠をおかぶりになって、（兼家殿の）お膝に枕をさせてやって、ものをお尋ねになったのだった。それで一つとして、将来のことを予言しそこなうことがなかった。そのように（兼家殿の）近くにお呼び寄せになるからには、（うち臥しの巫女は）まったく話にならない低い身分の者でもなくて、ちょっとした女房という程度の身分の者であった。

【参考】『今昔物語集』卷三十一の第二十六

今は昔、打臥の御子といふ巫世に有りけり。昔より賀茂の巫といふ事は聞かぬに、これは賀茂の若宮の託かせ給ふとぞ云ひける。「何なればかく打臥の御子とは云ふぞ」と思へば、打臥してのみ物を云ひければ、打臥の御子とは云ひけるなりけり。

京中の上中下の人、挙りて物を問ひけるに、過ぎにし方の事、行末に有るべき事、當時有る事など惣てかれが云ひたる事、露ばかりも違ふ事無かりければ、世の人皆、首を傾けて手を造りてこれを信じ貰ひけり。事には法興院も常に召して問はせ給ひけるに、かく正しく艶ず物を申しければ、深く信ぜさせ給ひて、常に召しつつ、御冠を奉り紐を差させ給ひて、御膝の上に枕をせさせ給ひて問はせ給ひけるに、思し召しける事に叶ひけるにこそ、常に召して問はせ給ひけるなり。

然れどもこれを受け申さぬ人も有りけり。万の事露違はず申し叶ふとは云ひながらも、然ばかりの人の御膝に枕をせさせて、巫に物を問はせ給ひけることの頗る落居させ給はぬ様なれば、これを受け申さぬ人も理なりとなむ語り伝へたとや。

〔注〕○首を傾けて手を造りて——頭を下げ手を合わせて。 ○法興院——兼家のこと。

